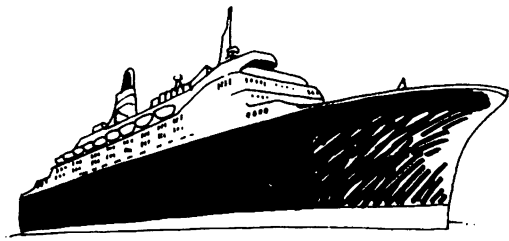


私の
よそ
び

松
尾
周
子

旅行記



はじめに

こういう大変な、言わば身分不相応な旅行が何故私に許されたのでしょうか。ふり返ってそのなりゆきを考えますと、その頃私はこの社会福祉の仕事にただひたむきに三十年近く生きて来て八十才もすぎましたのに、何となく先の見えないゆきづまり感の中に陥ち込み、も早これを打ち拓いてゆく体力も気力もない自分を見つつ一人でもだえているという有様の中にありました。

残暑の疲れも深い九月はじめの頃、沢山送り付けられる旅行関係のパンフレットの一冊を何気なく開いていますと、Q E II（クイーンエリザベス二世号）の招きを見つけました。私には無縁と思い乍らも美しい船の姿に心ひかれて見てゆきますと、一〇三日間の「ワールドクルーズ」（世界一周）の中には、いくつかの区分を分けて乗船出来ることが記してありました。

始発、ニューヨークからハワイ迄の二十二日間というところに目が止まりました。

このコースには大西洋、カリブ海、パナマ運河通過という未経験の心をそる旅程がありますし、よく見ると私の選べるグレードで八、四九〇ドルと言う費用、しかも早期（九

月末迄）申込者へは二十五％の割引という好条件も見つかりました。折柄の円高です。私にも可能性があると知り忽ち引き入れられてしまいました。

私には日頃から大変気になっている診療の問題があります。一ヶ月間の私の不在という状況でこの点はどうなるかを試し度い気分もひそかに抱く課題でありました。

遠い大海原の旅の中で静かに考えるべきいろいろな問題を持っていました。思いがけず満子が同行するとの申出にもう決めるしかなかった私です。

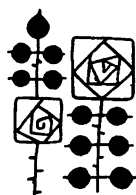
日新航空の藤田さんに逢い、私の希望を活かして一切を委ねたあとは毎日毎日楽しい夢一パイの三ヶ月でした。

気前よく何着かのドレスも用意して旅仕度をすすめました。

一月三日に出発し、一月二十五日に帰国しました。

この旅行記を二月から七月まで6回に分けて「みぎわ会便り」に掲載しましたものを、大変粗雑な報告ですけれどもかく一冊にまとめてみることにいたしました。

一九九七年 七月



平成九年

みぎわ会便り 二月号

旅だより(1)

二月に入りました。

新しい年の一ヶ月を、お健やかにお過ごしでいらっ
しゃいますか、お伺い申し上げます。

朝、まっ白な霜におおわれた庭がキラキラ光るのを
眺めますと、正に二月、き・さ・ら・ぎ・と・い・う・季・節・の、きび
しさの中から春を待つかなときめきを覚えます。

「老人ホームとインフルエンザ」がマスコミの話題
になりましたが、幸い私たちは今のところ守られ、い
つものようにあれこれ楽しい人間模様を画く明け暮れ
でございます。

私事になりますが、私と満子は一月二日より二十五
日まで、長い旅行をさせて頂きました。先ずは気にか
かる皆様の医療につきましては、やない、増村両先生
が、お忙しい中からしっかりとお守り下さることにな

り、のんびり遊ばせて頂きました。誠にありがたいこ
とでした。

さて、旅は今迄考えもなかった船旅になりました。
一月四日ニューヨークから乗船し、カリブ海、大西洋
そして「パナマ運河」を経て太平洋に出、ロス・アン
ゼルスまで北上し、五日間の太平洋横断クルーズ後、
ハワイに着きます。私たちはホノルルで下船し、翌日
空路関空へ帰着いたしました。「クイーンエリザベス
二世号」の世界一周の旅程は、ニューヨークからニュ
ヨークへ一〇四日ですので、その1/5弱を利用した
ことになります。

不安の方が大きい出発でしたが、文字通り「インター
ナショナル」の世界で、珍しく楽しい体験の日々とな
りました。次号より少しづつその中のトピックスを報
告する予定ですが、果たしてうまくお伝え出来るでし
ょうか。

私は播州平野の東北部、山と田圃に囲まれた地方で
生まれ、その郷里を離れることなく八十二歳までを生
活して来ましたので、「海」は先ず怖ろしいところと

思いこんでいました。が、この旅の一つの大きな体験は、「海」との出逢いでした。広い広い海、言い表す言葉もない美しい海の色、と、その神秘的な生命に溢れる表情に驚き、感動し、捕えられてしまいました。もう一度、あの海に逢いたい想いが今も湧き上がって来ます。

「豪華客船No.1」のQ・E・IIも既に三十年近く働き続け、老朽化が伝えられています。英国籍を持つ彼女の、歴史への誇りと気品がそこに感じられ、その中で練り上げられたはずのサービスには、眼を開かれ心を打たれることが沢山ありました。

「主用語は英語」と明記された世界で、殆ど聞くことも話すことも出来ない私たちの二十日間は、時には恥ずかしく、時には哀しく又口惜しく、しかも、それ故にうれしくも楽しくも面白くもある、忘れ得ぬ想い出に満ち満ちた、一九九七年のはじまりでありました。では、次号をおたのしみに。

皆様のご健勝をお祈りいたします。

かしこ

みぎわ会便り 三月号

旅だより(2)

「ニューヨーク」

一月三日、成田から十二時にニューヨーク直行のJALに乗りました。この十二時間余の空路は、Cクラスとしてはいつもよりせまく、やや騒々しくて眠れず、すっかり疲れてしまいました。

今迄海外旅行といえども、コンダクターに導かれる一群の日本人の一人として行動すればよく、自分の塔乗券も手にしないものでしたが、このたびは二人切りの単独旅行です。

ウロウロ歩いていると突然背後からパンと撃たれるとか、行きかいざまにバッグをさらわれるというような、ニューヨークの暗黒街のイメージが心のどこかに貼りついていることや、言葉の心配から空港で迷子になったらどうしようかと、言うも恥ずかしい恐怖に似た緊張感が不眠の一因だったかもわかりません。

JALは定刻一月三日午前十時三十分にジョン・ケネディ空港に着きました。乗客の流れに混じり簡単な標示を見乍ら歩きますと、すんなり荷物受取場所へ出ました。三個の大きなスーツケースも、間もなくターミナルに乗って出て来ました。出迎えて下さっているはずの旅行会社 社長岩田さんを、満子がすぐ見つけました。もう安心です。

岩田さんのピカピカの「キャデラック」に、荷物も私たちも無事おさまりました。ケネディ空港は古びた感じですし、広い周辺は淋しい冬景色です。地面は沢山デコボコが出来たままの舗装なのには少し驚きました。岩田さんは「お金がないんですよ」とあっさり仰るのですが。まだ四十歳代の岩田さんは立派な体格で、信頼感を与える紳士です。日、米の両国籍を持っていると話されました。道々明快な説明を受けながら一時間くらいで、マンハッタンの中心に近いセントラルパーク前のホテルにチェックインしました。

ニューヨークの市街は堂々としたたずまいです。ロンドン、パリとは一寸違う、ダイナミックな若々し

さの漂う感じを受けました。ビルの窓や、街角には処々に、まだきれいなクリスマスリースやツリーが残っています。それは私たちが歓迎されているようで、うれしい気分には誘われます。

この日の午後と四日午前の数時間を、岩田さんのハインドルで親切で正確なガイドを頂き、ニューヨークの一部を観光いたしました。

三日午後はエンパイアステートビルの観光だけで終わりました。二〇〇m以上の長い行列に並んだ二時間で疲れてしまい、その夜の豪華なロブスターの夕食もキャンセルして頂き、ともかく眠ることにしました。年末からの風邪を持って来た満子には休息が必要です。夜は持参の抗生剤を注射しました。

私は翌早朝、道路を横切ればそこにあるセントラルパークを三十分程散歩しました。大きな岩石と豊かな雑木林で出来ている広い公園です。ロンドンのハイドパークを思い浮べると、やっぱりアメリカ風だなと感じました。寒い中をジョギングする人、落葉の上を走りまわる可愛いリス、ベンチで静かに座っている一

人の老人という風景を、私もベンチにかけて眺めました。吐く息の白い朝です。

この二、三日ニューヨークは珍しく暖かいとかで、ミンクの帽子、狐の衿まきという私の重装備は不要になりました。

セントポール寺院、メトロポリタン博物館、五番街でのショッピング等、ニューヨークへのあのいまわしいイメージはすっかり拭い去られ、もう一日早く来ていればよかったと思うほど、魅力に溢れる世界のニューヨーク、私の好きなニューヨークに変わってしまいました。

午後三時には乗船です。混み合ったり、手続きもあるからと聞かされていましたけれど、岩田さんのおかげで何のこともなく、ウエルカムの文字をつけたブイのところで「ここに暫く居ますから」と言っただけで岩田さんと別れ、指さされるままに歩いてゆきますと、どこから船になったのかもわからないまま、いつの間にか「3110」のキャビンに来ていました。各々キイをもらって這入りますと、もう私たちのスツーカー

スも二つのバッグもきちんと部屋に着いています。

キャビンはバスルーム、四、五帖位の物置室、その中には小さな冷蔵庫と金庫が備わっています。つづくツインのベッドルームには、立ったまま這入れるという大きな洋服ダンス、夫々に三段の引出し、小テーブル、アームチェア、ストールが窓側に置かれ、TVと鏡台、そしてドライヤーも備えられています。テーブルには歓迎のシャンパンと共に一輪の花、果物かご、アイスキューブの詰まった大きなボックスが置いてあります。

やっと着きました。ここがこれから二十日を暮すわが家なのです。

荷物をそこそこに片づけ等している間に、出港のドラムも鳴らず何のアナウンスもなく、いつの間にか船は夕昏れのハドソン湾を離れていました。

自由の女神を見なければ／＼と気付いた時はもう手おくれでした。どこからどう眺めるのかと、ウロウロしている間に、わがQ.E.Ⅱは世界一周の航路へと波を切って大西洋を南に向かい走っていたのです。

◎このレポートを書き上げました翌日に、エンパイアステートビルでの発砲事件のニュースがありました。怖ろしい世の中ですね。

みぎわ会便り 四月号

旅だより(3)

「船内生活」その一

毎日夜八時頃にA5二つ折りの新聞が配達されます。1頁の上端2cm巾がネービーブルーで縁とりされ、その中にDAILY PROGRAMと白で抜かれ、その右端にQ.E.IIのシンボルマークが細い白線で描かれています。

基本色は白ですが、ブルーのリボンの下に1・2cm位のブルーに平行した横長の枠が細い黒線で囲まれています。二行の上段は 年 月 日 曜日、日の出、日没の時間とその日の寄港地があればその名が記され、下段には今夜のドレスコードが記されます。フォーマ

ルとかインフォーマルで現わされています。例えば、フォーマルの日は、男性ディナースーツ又はタキシード、女性イブニングドレス又はドレッシーなカクテルドレス又はワンピースという工合です。

なに気ないペーパーですが、やはり洗練されたデザインだと感じました。他の4ページには、その日のハイライト、イベント、ショウ、音楽会、講演、映画その他上部スタッフの紹介、必要な事務関係デスクの場所等の案内、各レストランの三食の開始時間、オープンデッキのアフタヌーンティの時間、内容等船内生活のすべてのメニューが詳しく記載されています。

船客はキャビンのグレードにより区別して定められているレストランで食事を摂る以外はすべて自由にサビズメニューを選ぶことが出来ます。カジノで遊ぶこともーここでのみ現金が必要ですが、どこかのバーで楽しむことも、どこかのイベントに参加したり、観賞したりはすべて自由です。あれもこれもと忙しく一日を暮すのも、一日中船内デッキのソファで本を読んでいる事も各自の選択のままです。

五百席はある重厚なインテリアのシアターは、朝は礼拝の場となり、午後は講演、夜は静かな美しい音楽会や映画館としても使われます。若々しいエリザベス女王の像が大きく後壁にはめこまれた優雅なクイーンズルームでは、毎晩バンド付のダンスパーティーが開かれます。踊れない私などソファで眺めていますと（そのための職員とあとでわかりましたが）中年の上品な紳士が必ずにこやかにエスコートして下さり、足を踏んでばかりいる私を立派なパートナーとしてリードしダンスを楽しませて下さるのです。曲が終ると腕を組んで静かに席まで送って頂くというのも仲々いいものです。一寸基本的なステップ位は身につけるべきだと思わずには居れませんでした。

エレベーターホールは、五・六カ所あり、各五基のリフトが並んでいます。最下位の七から一まで、その上にQ（クォーター）、U（アップパー）、B（ボート）と3デッキの十階位になるのです。上階程数字は少なくなるのでフト、とまどうことがあります。1〜5階位が一般客室で、数字が低い程上位になります。Q・

U・Bにも少数の客室がある事は本の写真で示されていますが、これはVIP用のすごいスイートルームです。例えば王侯貴族、又はサッチャー女史、ルーズベルト大統領という方々用に使われています。ちなみに私たちは3デッキで丁度中程の庶民クラスでした。

最上階のボートデッキ階はその下のU・アップパーデッキが吹き抜けになっており、両側はショッピングフロムナードになっています。有名ブランドの小さな店が並んでいて眺めて歩くにも楽しい道です。この階の最後部で重い回転ドアを回して出ると広いボートデッキです。オープンデッキも三階あり階段で昇降出来ます。

オープンデッキからは白い波の航跡を作り乍ら走る船に正に自分が乗っている事がよくわかります。煙突から空に流れる白い煙と海上の白く泡立つ航跡が上下に重なって流れつつ消えてゆくはるか彼方の一直線の水平線までは唯々深く広い紺碧の大海原ばかりです。あきる事なく眺めさせる魅力があります。地球はすごく大きく美しい生命体だと感じる時です。

朝のデッキは沢山の勇ましいジョギング姿、ウォー

キングする人たちのまじめな顔々、静かにデッキチェアに座る人など、夫々旅のスタイルを見せられます。

厳冬のニューヨークで乗船し三日後には北米大陸の南端から虫様突起（盲腸）さながらに、カリブ海に垂れ下がっているマイアミ半島です。ここはもう晩春というより初夏のさわやかな風です。小さな地図で見るカリブ海は瀬戸内海のように大小様々な島々が浮かんでいるのですが、実は島影一つ見えない大海原で殊に深い群青の美しい海でした。コロンブスの探險の長い長い航海のすごさを改めて考えさせられました。

食事は三食フルコースです。レストランも自分の席も決まっています。男女同一のまっ白で軍服のような肩章と金ボタンの制服のウェイター、ウェイトレスたちは夫々担当のテーブルや仕事が決まっている様です。唯一人背広姿のチーフマネージャーは全室に眼を走らせ乍ら夫々のお客に愛嬌溢れる挨拶を怠りません。私の好きになれない一人でした。（ナイショです）

彼等は毎日毎時明るい新鮮な笑顔と挨拶で私たちを迎え、時々、コンニチワ、オハヨウゴザイマス等と

サービスしてくれます。渡されたメニュー紙を手におードブル、スープ等、三・四種の中から一つを選ぶのにもいつも時間をかける私達を静かにおだやかに待つ姿に、「サービス」という言葉を新たに知らされる思いでした。

みぎわ会便り 五月号

旅だより（四）

「船内生活」その二

装　　い

一月七日のデイリープログラムにはじめて「フォーマル」のドレスコードが出ました。「コモドル」——船長——の歓迎パーティーが夕方五時頃からクイーンズ・ルームで開かれること、クイーンズ・ルームへは図書室を通った側から這入ること、今夕の招待客は「クイーンズグリル」「プリンセス／ブリタニアグリル」を利用して乗客たちに限ると記されています。乗

客の階層により三日間に分けて同じ歓迎パーティーが催されるようです。

「コモドール」とはこの旅行を経営しているカナダの「キューナード社」の五隻の豪華客船中最高位のＱＥ２の船長に与えられている称号であること、船長の名は「ジョン・バートン・ホール」であること、この旅程に現在一五〇名余の日本人乗客があること等を日本人スタッフの芝原さんから教わりました。

芝原さんはまだ若く美しい女性で、唯一の日本人のスタッフです。デイリープログラム、毎日のレストラのメニュー内容、外、船内で配布される情報の翻訳や日本人乗客のサービスを担当されています。

さて、このパーティーに私たちは和服で出ることになりました。私は明るい藤色地に御所模様の訪問着、帯は淡い紫のバラを画いた黒羽二重としました。満子はグレイ調の光る生地に絞り模様のある訪問着に朱色に金糸を織り込んだ袋帯です。私たちが五時過ぎクイーンズ・ルームに着きますと入り口には大きな壺に花々が豪華に飾られています。コモドールは数歩這入った

ところに制服制帽の重々しく權威ある姿で立っておられ、船客一人一人に眼を合わせ、しっかりと歓迎の握手をしてくださいます。二五〇〇人の生命の安全と、全世界から来た乗客の快適な旅の責任者のトップらしく言いようもない威厳に満ちた姿です。思わず深いお辞儀をしてしまいました。

広いクイーンズ・ルームですが、もう一パイの人です、何人かの日本人の姿も見受けられました。すぐにシャンパングラスが配られます。向こうのステージではもう優雅なダンスを楽しむ人たちが見えます。ソファでくつろぐ人たちもあります。

乗客の多くは年配のリタイヤ層ですけれど、そうした人たちが盛装して三々五々にこやかに語り合う姿を楽しく眺めました。その一人である自分を意識しますと本当に夢見心地とはこういうものなのかと感じてしまいました。

わたしの度重なる外遊でも国際会議とかドクターズ・ツアー等ではこういう装いの場がありましたけれど、夜のドレスアップを楽しいとは感じない私でした。む

しろ荷物が多くなることや、後始末、アクセサリーを考えるのが煩わしいとさえ思っていました。「船旅」を避けて来たのもそうした装いへの準備や心遣いをしたくない気持ちが生底流をなしていたと言えます。こういう国籍も言葉も問わず、偶々の旅を共にする者たちがそれぞれに盛装してにこやかに語り合う交わりが大事だと言うことが少し分かって来るのでした。「社交」という人間関係を滑らかに形成する文化はこういう中で大きく育ってゆくのだと感じましたし、誰もが気持ちよく楽しめるための「マナー」も同じだと漸く納得できてきました。日本人が外交下手で社交を楽しむことにも不器用なのはやはり小さな島国の中で、同血・同文の交わりが多く、それは温泉宿のお揃いの浴衣と丹前に下駄という、裸に近いだけの宴会の姿に象徴されているのではと、ひどく対照的に感じてしまいました。

キラキラ光るドレス、フランス人形の様に大きく膨らんだスカート、真紅・黒・白・青色と色とりどりのフォーマルウェアの中で和服にはそれなりの美しさと

気品のあることはよく分かりました。レストランの人たちもわたしたちが着物姿で這入ってゆきますと一瞬ハッとする表情を見せ、続いてはいつもより十倍も明るく楽しそうな笑顔で迎えてくれます。私の好きだったソムリエさんも親しみをこめてグラスを運んでくれるのでした。

或夜、それは洋服でしたが、私の隣席の外人女性が私のネックレスを指さし、「とてもきれいですね、ステキ、ダイヤですか？」と語りかけて下さいました。昨秋、小樽のガラス博物館で買ったものです。「いいえ、これはガラスです。ヴェネツィアガラスです。日本で買ったものです。」と私が答えますと、わたしの「ヴェネツィア」を二度も聞き返し「おお、それはヴェネシアと言うのです。」と教えて下さるのです。その話し方や表情は親しみがあり、楽しいものでありました。先日、ある雑誌で「VENEZIA」のスペルを見つけ、あの時の女性は何国人だったかしらと思ったことです。

食

私たちのブリタニアグリルでは三食共フルコースです。三々四種類のオードヴル・三種のスープ・三種以上のメインディッシュは夫々ナンバーを付けて書き並べられています。その中から選ぶのです。パンは、朝はトーストがありますが、昼・夕には丸いパンが二種位つきます。パンはとてもおいしくて、御飯を懐かしむ気持ちは出ませんでした。食べ物の注文の後には必ず「プリーズ」を付けることがマナーだどこかで読んでいましたが、仲々スムーズには出来ません。

「Tea or Coffee?」とにやかな問いかけに「コーヒー」とボンと答えてしまうのです。気を付けていますと、それでも一週間位経た頃から「コーヒー プリーズ」とか「スープ ナンバー2 プリーズ」と一応反射的に唇に上るようになりました。

困ったのは大きく堅いステーキです。日本に比べベチキンや豚肉は割合美味しいのでビーフは避けるようにして来ました。お魚もスモークサーモン以外は日本のお魚に勝るものはないと思いました。量が多く、いつ

も残るのも情けないことです。「Sorry, it's too much.」を繰り返すばかりです。

グリルではチーフマネージャーにワゴンサービスを注文している人が時々あります。フライパンに注がれたブランデーがポツと炎を上げるのは見ていても仲々美味しそうです。が、うまく話せない私たちは眺めるばかりでした。でもある日勇気を出して、「明日の夕食はワゴンサービスで柔らかくて小さなステーキを作って欲しいのです。」と注文しました。マネージャーはにこにこ顔で「O.K.O.K.」を繰り返してくれました。

翌夕、私たちの席の前へワゴンを押して来て、早速真面目な顔付きのソース作りが始まりました。様々なスパイスや粒胡椒の小瓶をくるくる廻してふりかける様子は正に一つのパフォーマンスです。目の前でブランデーがポツと炎を上げました。彼は得意満面のウインクを楽しく待つ私たちに投げます。私たちもにこにこするのです。こうして供されたのは正に神戸ビーフに劣らない、柔らかく、又小さなステーキでした。フランス料理風の手の混んだソースがかかっているの

す。「Oh,delicious! Thank You.」しか言えない私たちでしたが、本当にデリシャスでした。「きっと高いのよね。」とキャビンでの賤ましい会話はさりげなく隠して、三回位ワゴンサービスを受けました。が、下船時の請求書にその分はどこにも記されていませんでした。

メインディッシュの前に出るシャーベット、そしてデザートにも又シャーベット、満子は一日平均四個のシャーベットを食べ続けました。スモークサーモンを特別のナイフで薄くきれいに切り、花のようにお皿に並べる人、食後のチョコレートを配ってくれる人、レモンスカッシュか時々グラスワインしか用のない私たちへいつもにこにこして注文を取りに来てくれるソムリエさん、皆とだんだん仲良しになって来て、毎日同じレストランの同じ席の食事が一日の楽しみになって来たのです。別に、糖尿気味の方へとか、健康的なバランスのとれたダイエットの為にといったメニューもきちんと記されています。

先に食事の終わったテーブルのメイク・片付け・ク

ロスの交換も見ていて楽しい手技でありました。

ボートデッキには「リド」というバイキング様式の誰でも行けるレストランもあり、服装も自由で賑わっていました。けれど、私にはわがブリタニヤグリルが一番楽しいところでありました。

便り、読書

QE2のQフロアには広い立派な図書室があります。誰でも自由に入り、自由に読書が出来ます。デッキにはソファアが沢山あり、そこで海を眺めながらの読書も出来ます。私の好きなところでした。日本語の本も数十冊はあり、三冊程を楽しく読みました。数冊の文庫本も持って行きましたので、キャビンのベッド上で終日読書することも出来ました。電話もかかって来ず、来訪者もなく、定まった仕事もなく、終日ひたすら本が読める生活、殊にその本の内容が良い時はこんな楽しいことはありません。読了した遠藤周作の一冊と松本清張の二冊を文庫本でしたけれど、日本の有名な作家の本ですから良ければと図書室に置いて来ました。

誰かが読んで下さればと思っています。

日常的には手紙を書くのは私の好きなことの一つなのですが、海の上を走っている船の上からどうして手紙が出せるのか、という単純な考えの中で数日経ちました。五日目に日新旅行の藤田さんから「Jax」の手紙が届きました。手で書いた文字の手紙を懐かしく読みました。そして早速私も「Jax」でみぎわ園へ手紙を出すことに気がきました。キャビンには「Jax」用箋が用意されていたのです。第一便を書き、フロントデスクに渡しました。第二便を書きながら返事が欲しいと思い付き、海上のQE2への「Jax」の入れ方をフロントデスクで教えてもらいました。翌日、キャビンのドアの下から差し入れられている封筒を見た時のうれしさ！

懐かしいみぎわ園からの便りです。寄せ書、あれこれの情報、初場所の星取表、「二人っ子」のその後のこと等々、みんなの様子を賑に画きながら繰り返し読みました。

第三便はロスから、満子がオブションでディズニールンドへ行った後、一人キャビンで細々と書きました。

この日はオブションの日なのでフロントデスクもお休みです。教えられたラジオルームを探して行きました。留守のようです。マゴマゴしているとバツと扉が開き、士官服の青年の顔が現れました。私の差し出す「Jax」用箋を気軽に「OK」と受取って下さるので、「どれ位時間はかかりますか？」と尋ねますと、彼は「Ten minutes」の一言を残して扉の中に消えました。十分！何という便利な恐ろしい世の中でしょう。私は一寸ポカンとしていましたが、私の便りがピーピーとファクシミリで音を立てながらみぎわ園の事務室の片隅に落ち重なる様子を想像しました。そして、今日は人気の少ない船の中を歩いて3110のわが家に帰ったのです。



みぎわ会便り 六月号

旅だより (5)

パナマ運河

一月十一日は待望のパナマ運河を通過する日です。乗船後一週間経ち当初の緊張が解けると共に疲れが出て来ました。私は数日不眠と食欲不振です。

この日も窓に明るさが見えはじめる早朝、不眠のベッドを出て一人で最上階のデッキに出てみました。大きな明けの明星が輝いているのを見つけました。星からは何かメッセージが送られているように感じ暫く動かず眺めていました。水平線が少し明るくなって来ました。船の先頭のデッキへ回ってみますと右手に黒く長いパナマカナルへの防波堤と思えるハの字に拡がった線状のものが見えます。まだ人気のないデッキの最先端の手すりに倚りかかり無心に眺めました。薄ら寒い感じです。

昨日「THE PANAMA CANAL」という新聞紙一

面大のパンフレットが折り疊んで配られました。「カナル」という語は解剖学にもよく使われる言語です。神経や血管が骨を貫いて通る細い通路が「カナル」と呼ばれています。カナルという言葉からこの巨大な一つの天体である地球に人間が精根を尽くして作ったほんの小さな「溝」がパナマ運河なのだと知らされるようでした。

朝食を終えてデッキに上がってみますと各デッキは人で溢れていて前の方を見ることは出来ませんでした。船は既にカナルに這入っているようです。赤道に近い熱帯の強い日差しを浴びながら殆どの乗客はこの記念すべき旅程の一日をデッキで立ち続けて見守っています。

誰もが共有している感動・興奮が肌に感じられます。南北アメリカ大陸を繋ぐ細いくびれの部分を打ち割って作られた水路、パナマカナルは全長六十三kmだそうです。中央の山岳部は海拔九十三mだそうです。そのレベルを通過するために階段式に三段の水門が運河の両端に作られ、中央部は人造湖になっています。運

河のプロフィールをご覧ください。

運河について詳しく記述したパンフレットが配られています。読むことも出来ません。間違っていると思いますが、わかる点のみを説明いたします。水門部は幅三十二・三m、長さ二百九十四・一mの長方形の箱になっています。船が進入すると後ろの水門が閉じ、次のレベルに達するまで水が注入して来る仕掛けです。水位が次の段と同じになる迄船は停止しています。次の水門と同じ水位になると前の水門が開き、船は前進する。こういうきわめて簡単な理屈が魔法のように複雑で正確な機構を作っているのです。それによって六十三kmを通過するのに九時間を要するのです。Q E 2は船幅三十二m・全長二百九十三・五mですから正にスレスレの水門囲を航行するわけです。

暑さに参ってしまい、キャビンに帰りトロトロし、ふと目覚めて窓のカーテンを開きますと水門の本地が窓にピタリとくっつくばかりの隙間を置いてジリジリと船が進んでいるのが見えました。全く肝を冷やすと

言えいいのか、手を差し伸べて水門を圧したい衝動にかられました。

パンフレットによれば既に一五三四年にスペインのカルロス一世がパナマ地峡に運河を作ることを考えられ、運河の最適ルートを調査するように命じられたそうです。多分手に合わなかったのでしょう、当時としては。それから三世紀後の一八八〇年にフランスが二十年間手がけたけれど、疫病と財政的な行き詰まりにより失敗したのを、一九〇三年アメリカがパナマ国と契約の下に工事を引き受け十年を要して出来上がったと記されています。

運河の開通は一九一四年ということです。何と私と同じ年なのです。胸のときめく思いでした。莫大なお金が使われたことは想像できます。アメリカはフランスの運河会社には四千万ドルを支払って工事を始め、十年間で最初の設計が終わるまでに三億八千七百万ドル使い、一九〇三年以来の投資額はほぼ三十億ドルに達したそうです。一世紀前のお金です。

運河の造成には三つの重要な部門の学者と技術者が

必要でありました。即ち工事技術・衛生設備・組織です。この主要な問題は夫々有名な学者や技術者が係わったのですが、翻訳はこれ位でお手上げです。なお、パナマカナル通過には半年前からの予約が必要だそうです。

殆ど夕暮れになって遂に「QE2」はパナマカナルを通過し、大きなアメリカ橋の下をくぐり、太平洋に乗り出しました。これより北上してロスアンジュルス迄行き、再び南下し、あと太平洋を西に横断してハワイ群島に向かうのです。

ロス迄の二日間は殆ど読書で過ごしました。図書館にあった「男達の履歴書」という本はとても面白く教えられるところの多い本でした。出発時に何気なく空港で買って行きました。遠藤周作著「基利支丹時代」という分厚い本も感銘深い著作でした。深く教えられ、考えさせながら読了出来ました。

一月十六日はロスに寄港します。百五十人と聞く日本人のツアーの方々は皆下船されると聞きました。少し親しくなった二組の御夫婦をこの間に私のキャビンにお招きして満子のお点前でお茶を上げ楽しんで頂い

たりもしました。いづれも旅慣れた方達でお幸せな姿を見せて頂きました。

十六日、ロスに着岸しました。満子はデイズニールンドの観光グループに入り、下船して行きました。

小さな窓から見えるロス港の広い広い港岸はオモチャを並べたように自動車がいっぱい並んでいて空間もない有り様です。日本からの輸入車でしょうか。ニューヨークで岩田さんが、「アメリカ政府は日本車の輸入を嫌っているが国民は皆日本車が好きだ。何故かと言えば日本車は故障が少なく、燃費が良いからだ。」と言われたことを思い出しました。時々窓から眺めてもちっとも変わらないと見えたこの車群が夕方にはすっかり無くなっていました。

コトバの出来ない満子が無事帰船して来ました。デイズニールグズを一杯袋に詰めて楽しかったと興奮して一日七時間のオプシヨンの話を聞かせてくれました。日本人が下船され、又他の方々が乗船して来られたようですが、当時日本人は私達二名になっていると聞かされました。

もう残る旅程も五日になりました。

みぎわ会便り 七月号

旅だより(6)

オプシヨン及び付記

オプシヨンのこと

オプシヨンの案内書には

「ここに案内する寄港地観光ツアーは、一九九七年ワールドクルーズ・ブリッジ・アクロス・ザ・オーシャン―太平洋に架ける橋―での船旅がより思い出深いものになりますよう、キューナード社が自信を持って選び運航するものです。」という主旨に続き沢山の注意事項が記されています。一〇三日の全航程には一五〇ものツアーが用意されています。

私達の旅程にも二十八種ありました。「体力が要ります。」というような注意書きもきちんとしてありますので、大体三〜四時間、費用は三十〜七十ドル程度のものに決めたのです。

既に満席のものもありましたが、乗船券の中にはオ

プシヨン券も全部入れて送られて来ました。この船の乗客は大部分がリタイヤした年齢層ですから、すべてのんびりしたスケジュールになっています。が、船員の方は仲々大変です。大きなQ E IIが接岸出来るところは船から直接その地へ下りて行きますが、港湾設備の無いところでは本船は沖に投錨し、百人位乗れるテNDERボートが何隻も降ろされ、母船の小さなデッキからボートに乗り移ります。ボートがシャトルバスになるのです。ボートに乗る時は沢山の係員達が双方から私達を安全に乗り換えさせてくれます。ある日、少し波がありました。ボートがデッキに付きましたが、五十センチ位の上下動がありました。

一人の年配の女性がボートのパイプ柱を頼りにして足を上げました。と、ボートがスーッと五十センチくらい沈み込みました。横で順番を待ち乍ら見ていて私はハッとしましたが、見ると正に目にも止まらぬ早業でデッキから若い船員がボートに飛び乗り、彼女の前にピタリと背を向けて立ち、彼女をガードしたのです。そして丁度安全なタイミングを見てボートとデッキ双

方から一人一人を二、三名で守り移してくれるのです。これこそ専門的なサービスです。見ていて、私も又力強い腕に支えられて苦もなくデッキに乗り移り乍ら、一寸胸の熱くなるような感動を覚えました。

みぎわ園のピクニックでも係が慎重にプログラムを組み、不自由な園生たちを上下から抱きかかえてバスに乗せる様子が暇に浮かんで来ました。様々な小道具をぬかりなく揃えて書き出し、点検し、夫々責任者を定めてほんの二、三時間の旅が無事終わるまで誰も緊張が解けないのです。

サービスという言葉をは沁々と考えさせられました。オプシヨンの日は早くからボートが降ろされ、目的地に着けば既にシンボルマークになっている赤い大きなパラソルをさしたり、手に持ったりして純白の制服の係員が小さなデスクを置いて待っています。私達はコース毎の小さな名刺のようなカードを見せて出入りすることになっています。

こうしたスタイルが出来上がるまでの船側の苦心がよくわかる気持ちです。観光地を走るバスの窓から沖

にQEEⅡの気品ある大きな姿を眺める時に「大船に乗った気持ちで——。」という古い諺が生々しく思い出されたものでした。

さて、オプシヨナー——。

第一 マイアミビーチでした。一月六日です。

下船してすぐバスに乗り三十分程走りますと「ヴィスカヤハウス」に着きます。広大な熱帯植物の繁る森の中の広い道を歩きますと数分で立派な建物——宮殿のような——の前に着きます。今世紀はじめに農機具の発明で億万長者になった方の避寒用の別荘だったものです。

個人の邸宅としてはアメリカ最大だそうです。夫々に趣向をこらしたイタリヤ・ルネッサンス・スタイルの豪華な部屋が二十六室もあります。持主の遺志でマイアミ市の博物館になっています。

極寒のニューヨークを発って三日ですが、暖かい晩春ともいえる気候です。

観光を終えるとショッピングです。ヴィスカヤグッ

ズが沢山ありました。相当の時間歩きましたので、この店でコーラを飲んで小憩しました。僅か三日ですが、久々に土の上を歩けるのはうれしいと感じました。

第二 コズメル島 一月八日

カリブ海に点在するメキシコ領では最大の島ですが、十km×三十km位のジャングルに覆われた殆ど平坦な島です。はじめてテンダーボートで往復しました。南国の空も美しく海は又透明な渚を作っていました。

バスで数十分、ガイドの青年が「丘」という所に着きました。小高い丘は夏草が茂り、ヒョロヒョロと高い樹木がバラバラ生える中に細い砂利道が通っています。その辺り一帯に一〇〇m×一五〇mの遺跡があります。マヤ遺跡と聞きましたが、崩れた石積みがあるだけです。マヤ族という原住民の神殿やピラミッド、又住居などの跡です。昔は金が採れたとも言われました。余り大きくない少し黒ずんだ石ばかりですが、何とない懐かしさを覚えました。帰り路には大倉庫のような建物の中にひしめくお土産物屋さんを見るのが楽

しかった所です。暑さのきびしい半日でした。

第三 カルタヘナーコロンビア

一月十日、船はもう南米大陸に近づいています。熱帯の暑さになりました。船の図書室で出会った老紳士から話しかけられました。「自分は六十五歳で医師になった。今は八十五歳だ。」とのこと。私も臨床医だと言いますという話されますが、余りよく分かりません。オプシオンはどうかと聞かれ、「明日はカルタヘナだけ暑いから止めようかと思っています。」と話すと、「仲々面白いところだから是非行きなさい。」と勧められました。彼が言われた「インタレスティング」という言葉を覚えていた自分がうれしくなりました。

ここも金、サファイアやエメラルド等の宝石が採れる所だそうです。ボートを降りて赤いパラソルの係員の指差す方へ歩きますとびっくりする程の客待ちのタクシーが並んでいます。一人の親分らしい男―恐い感じの小父さんです。―が何かサインをすると一人

の運転手が黄色い車を持って来ました。

「この辺の有名な所を一時間位見物したい。いくらですか?」と精一杯言葉を探して言いますと、「O・K」。一人十ドルだとのこと、満子と二人勇気を出して乗りました。この辺は十五、十六世紀にはスペインの勢力下にあったとかで、海辺に沿って高く厚い城壁が島を守っています。フランス・オランダ・イギリス等の侵攻に備えたものだを書いてありました。

町は貧し気に見えました。宝石店へ車を止めてくれましたが、薄暗い店内の様子は気味悪く、殆ど見ずに車に帰りました。船着場に来ました。先ずは一時間です。運ちゃんは一、二十ドルと言うではありませんか。一寸恐ろしい気持ちもありましたが、私は力強く「ノォー!」と言いました。そして、「あなたははじめに一人十ドルと言ったでしょう。」と明るい表情で言いました。彼は暫く首を振っていましたが、私は十ドル札を一枚、二枚と彼に渡し、もう一枚の十ドル札を「チップよ、サンキュー」と出しますと彼の顔はびっくりし、パッと花が咲くように一気にうれしそうになりました。

古い教会等見度いと思う気持ちもありましたが、冒険は止めて早く赤いパラソルへ帰ることにしました。

グループツアーで来ている人達はガイドがついてあちこち見たと後で話して下さいましたので、この次から私達もグループに加えて頂くことにしましたが、パナマを通過するとロス、そしてメキシコのアカプルコのみです。アカプルコもマヤ系のインディオの町です。アメリカからホテルやゴルフ場等進出している様ですが、似たりよったりの感じでした。

第四 ハワイ島の空中観光

一月二十二日、船はハワイ島に接岸しました。港には白いレイを持った沢山のお土産屋さんが声を上げて歓迎してくださいました。これが最後のオブションです。

私はこのハワイ島ではヘリコプターでの空中散歩を予約していました。今迄のものは一桁違う二百六十ドルを払いました。二十年余り前ハワイへ来ました時はキラウエア火山の火口近くまで来て、花火のよう

に高く美しく溶岩が吹き上がるのを眺めた経験があります。

空中からの眺めはどんなに素晴らしいかとの期待とヘリコプターに乗れる魅力がありました。楽しみにしていました。希望者は僅か十名でした。バスですぐ空港へ行き説明を受けましたが、何にも分かりません。渡される救命具をしっかりと腰に巻き付けました。

五人乗りの小さなヘリです。パイロットは鼻唄まじりの気軽さです。パイロットと袖が触れる位の狭い機内です。轟音を立ててプロペラが動きはじめると小さなヘリはトンボのようにひらりと飛び立ちました。

生憎の曇天で視界はダメでした。西の海岸に近い所でやっと溶岩が人の手の指の様に別れて赤く光り乍ら海に落ちる景色を見たのみでした。五十分の飛行は雲の中ばかりで終わりました。

終わりに

翌朝、オアフ島ホノルルで下船し、出迎えて下さった旅行社の車でホテルへ入り一泊しました。何回か訪

れたホノルルですが、随分変わっていました。きれいなダイヤモンドヘッドの海に降りる稜線も立ち並ぶホテルで妨げられて見えなくなっていました。

私の海外旅行は一九六八年にはじまりました。

ウィーンで開かれた第九回国際女医会への参加です。社会事業を志してしまつた私に重ねて海外旅行が出来るとは思いませんでした。数十名の「日本女医会」のグループと共にソヴィエトからイベリア半島まで全ヨーロッパの国々の首都を訪れた一ヵ月の大旅行でした。

その後思いもよらず一九七二年に「国際老年学会」(於：ソ連キエフ市)に参加する事が出来ました。老人ホーム事業に行き悩んでいたその頃の私は、同じツアーのメンバーに加わっておられた老人福祉の大先輩方との交わりが許され、二十四日間のソ連から英国・北欧の旅の中でみぎわ園形成の光と道を示されることになり、以来海外旅行ファンになってしまいました。

過去二十年余ずい分沢山の海外旅行をさせて頂きましたが、八十歳を越えてはもうグループツアーのメンバーに加わる事は止めようと心に決めていました。そ

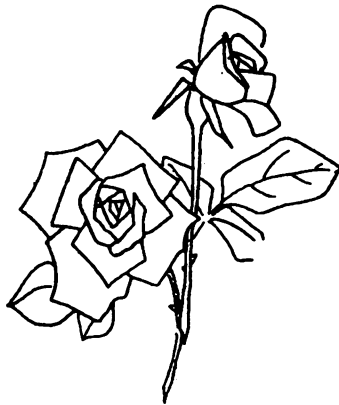
の私に不意にカボチャの馬車が訪れ、銀の靴を履かせられたこの旅です。日新航空の藤田さんとの出逢い、満子が同行してくれること、折柄の円高等々全ての条件に恵まれました。

Q E II の船長コモドールの姿に出逢ったこと、船側が見せてくれたサービスの数々、今に至ってまた新しい学びと体験を与えられるシンデレラの二十日間でした。みぎわ号はQ E II の十分の一にも及ばない小舟ですけれど、私はこの一年又、船長の制服を身につけることになりました。これからは荒波の上を渡るべきみぎわ号のトップとして祈りつつ力を尽くさねばという気持ちです。

旅だよりをもっとうまく楽しく記したいと考えてペンをとりましたが、記述出来たことはほんの一部に終わりました。

ご愛読ありがとうございました。

一九九七年六月十七日



エッセイのこと

平成六年春 みぎわ園施設長を退きました。理事長、施設長の兼任は好ましくないと監査の都度言われ乍ら、敢えてこの独裁体制を二十五年もつづけて来たものです。

これで「カルチャークラブ」にも通えると思い、折よく目に留まったD社の案内から

月二回の習字は神戸

月一回のエッセイは大阪

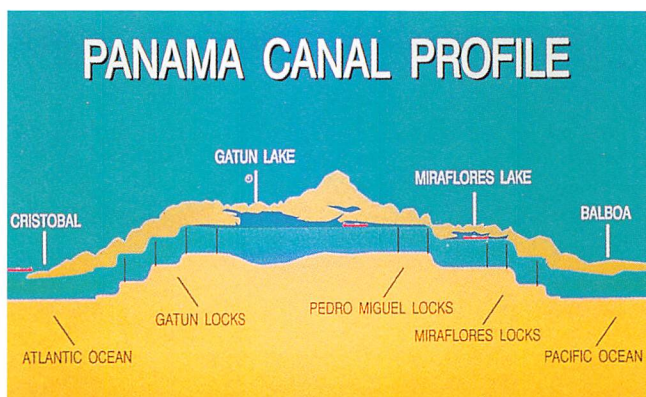
の二つを選びました。

行ってみると一世代若い方たちの集いでしたが皆、美しく賢い奥様方です。楽しく交わりに入れて頂き又大事にして頂くので、八十才の私に巡って来た小さな春のようにうれしく感じています。

作品は幼稚ですが旅の記録だけでは淋しいので自分の気に入っている四編を加えることにいたしました。



クイーンエリザベスⅡ世号





●上船ニューヨーク●



船長 ウェルカム・パーティーで



ダンスパーティ(クィーンズルーム)



ブリタニヤ(ソムリエと)



船長主催 パーティ

デッキにて



オプション
カサブランカ



ある一日

四回目の遺言書がやっと出来た。

公証役場は大きなビルの四階にあり、広々と明るくきれいな部屋であったのと、公証人が物静かな老紳士でやさしく対応して下さったので私の緊張感は柔げられた。案内の銀行員が礼儀正しくあたたくく接して下さる事も私にはうれしく感じる想いであった。

この十数年間に三回も公正証書を書きかえねばならない、言わば深刻な事が次から次へと私の身にふりかかって来たことと、その中をよくも今日まで生かされて来たことよ、という気持と共に、どうぞ、もうこれで終りになりますようにと、心より祈らずには居れなかった。

満子は車の中で待っていてくれた。

「お待ちとおさま、やっと終ったわ」

「よかったですね。これから大丸へでもゆきましょ

か。お姑さん」満子は明るく話しかけてくれたが、今私には何んにもほしいものも、見たいものも、食べたものもない、とは言え、このまま家へ帰る気分にもなれない空しいような脱力感が体中に拡がっていた。

見上げる空は晴れ渡っていてビルの合間から六甲の山脈が青く見えている。「ハーブ公園へ行ってみたい？」

一度、行ってみたいナーと思ってたのよ」満子は素直に車を走らせてくれた。……

丸いゴンドラが宙に浮き上ると思わず、キャッと二人は声を上げた。怖ろしさにふるえるが登る程に拡がる眼下の風景はすばらしく怖ろしさも忘れ楽しくなった。

山頂の店で私は小さなハーブの陶器の箱と匂い油を一本買った。花好きの満子はハーブの苗を熱心を選んでいる。

山頂から「風の丘駅」までの坂道を歩くことにした。割合急な降り坂なのでところどころ満子の手を借り乍らゆっくり歩いた。

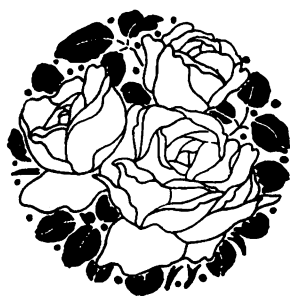
こんなきれいなところを作ろうと誰が考えられたの

かしら、ハーブの花々は殆んど終っているけれど、時々風に乗ってかすかなかおりが流れる。人通りも少なく静かな怪であった。

今年としては珍しい五月晴れの日である。来てみてよかったね、と、互いに話し合った。

「今日はほんとによかった」 私は心の中でこのことばをくり返した。

(一九九五年五月)



エッセイ No. 2

二つの旅

一、青 春

女子医専の卒業旅行が関西方面と決まった。私たちはそれには参加したくなかった。その間に四人で気軽な旅をしようと話し合い、いろいろなパンフレットなどを集めた。

結果、国鉄線中最も標高の高いところを走るという「小海線」に乗り、八ヶ岳高原付近を歩く三泊四日のプランが生まれた。

夜、新宿を中央線で発つと翌朝「小淵沢」という駅に着く。ここから小海線が出て、「小諸」までゆき信越線に連結するのである。

私たちが新宿に乗った列車は空いていた。少し離れた席を占める青年たち四人組が何故か私たちにしきりにサインを送っているのに気付いたが私たちは無視することにきめた。

小渕沢の朝は少しひんやりと感じる高原らしい気配である。

見れば彼等も降りている。そして近づいて来て「皆さんは〇〇医専の学生さんですね」と話しかけ、自分達は某医学雑誌社で「△△医学」の編集をやっている者だと自己紹介された。「△△医学」の名は私たちもよく知っている。彼等の今日一日のコースが全く私たちと同じであることもわかり、いつか一つのグループのようになってしまった。

列車は美しい初夏の信濃路を千曲川に沿うようにゆっくり走った。お天気も良く列車も混んでいない。旅情が私たちを親しくした。

八ヶ岳山麓にはボケの花がそこに色鮮やかに咲き、カッコウが澄んだ空気をふるわせてしきりに啼き交わしていた。峰々には残雪が光る。こんな風景を私達は独占し、笑ったり、歌ったりしながら歩いた。

近くにある「松原湖」もコースに入っていた。静かな山の湖である。ボートに乗ったりカヌーまがいの舟をこいだり、時には笑いころげながら一日を楽しく遊

んだ。

新しい仲間と別れ、第一夜は山深い湯宿に落着いた。まだ電気の来いていない湯の宿のランプの灯の下で私たちは「あのA氏ステキね」とか「B氏はちょっと」など、彼等の品定めに興じて又笑い声を上げた。

三日目は軽井沢まで歩いた。野道の両側には可愛い桜草が一パイ咲いていた。自分たちだけの楽しい一日を疲れすることもない若さで歩きつづけた。

軽井沢からは汽車に乗り、その夜は仲間のMさん宅で泊めて頂くことになっていた。

茨城県〇町の彼女の家は立派な構えである。

いかにもお医者様らしい少しこわい様に感じるお父様は早速私達に臨床診断のテストをされたのでびくりしてしまったが、その夜は広いお部屋で沢山のごちそうのおもてなしを頂いた。その上、お父様からは一人ひとりに十円ずつものお小使いを頂いた。

帰京後私たちはこれでお揃いのスイスコットのワンピースを作った。彼等と約束していた井頭公園での思い出会にはそれを着ることにしたのである。

それから再度両グループで旅をしたり、時には銀座で一緒にお茶を飲むという形で私たちの交わりはつづいた。

数年後には、ここから二組のカップルが生まれるという運命的な出会いになった。

一、水のように

スイスエアのファーストクラスでゆく旅に参加した。一行は十七名だが私だけがシングルであることを成田に集まってから知った。

機内では隣席の紳士が話しかけて下さった。眼科の開業医だとのこと、私は田舎の開業医であると話すと、親しい気分になった。共通の話題も多く一人旅の淋しさを忘れさせられた。

グループもコースも異なる私たちは「チューリッヒ」で手を振って別れた。

初夏のスイスアルプスは素晴らしい、感動の連続の中でも私は病床に置いて来た長男のことが気にかかり、時には自責にも似た想いに沈んでいた。コモ湖から電

話が出来た。聞けば「満子の弟たちが訪れてくれ、皆でマージャンを楽しんでいます」という嬉しいこえであった。この便りに力づけられて、以後私は独り旅を充分楽しんで過ごした。

帰りもチューリッヒからの搭乗である。空いていた私の隣席へ暫く経って乗り込んだのはかのD君ではないか。

ヤア、マアと再会を喜び合った。一別以来十日の夫々の旅程のことなど私たちは打ちとけた楽しい気分でした。機内食のスプーンをいじり乍ら彼は数年前に夫人を亡くされたことや、夫人と共にされた旅のことなども淡々と話された。私もつい戦争で夫を失ったことや今打ちこんでいる仕事などをためらいもなく話してしまった。

この旅の途上で作った私の俳句も見せたり、どうしても形にならない一句を見せなどした。

私がうとうとして目ざめると彼は私の句をいい一句に仕上げていて下さっていた。

故国に近いシベリヤ上空で夜明けになった。あの美

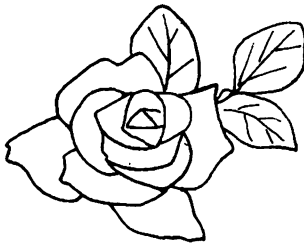
しさを忘れることは出来ない。暁の光が弧を画く雲を朱に染めつつ拡がりゆく様は畏れを覚える迄に壮大である。息を止めて小窓に額を押しつけて見入っていた。

成田に着いた。

私たちはチューリッヒの時のように手を振って別れた。

名も告げず、名刺交かんもせず、はるかなスイス往復の長い空の旅の快よい道づれであったのはさわやかな想い出である。

(一九九五年十月)



エッセイ No. 3

香り

十月十日は国民の祝日である。

日曜日の午前には礼拝を守る私にとって、祝祭日はまる一日が休日になるうれしい日だ。「まあ、きれいなお天気」雨戸を開けて目に入る高く澄んだ青い空が思わず声になる。「高橋さんはどうかしら」昨夜は血圧急上昇があるとかで一応と薬だけはしたけれど、一寸たづねてみると、私はテラスから手ぶらで、つかけのまま「いずみ寮」へ向かった。

テラスから十メートル程度を通り抜けると道へ出る。そこを右へ曲るとほんの一分で軽費老人ホームいずみ寮の玄関だ。休日なので事務室には人影もない。私は黙って寮の廊下を高橋さんの部屋に向かって行った。

ノックに応えてドアを開けた彼女はきちんと着替えもし、いつもと変らない様子、「お早ようございます。お気分はいかが」と声をかける私をにこにこ顔で招き入れて下さった。

向い合って座る。タンスの上の小さなお仏壇は今供えられたばかりとわかるお花にお線香がゆらいでいる。私は一寸ひざをにじらせお仏壇に向い暫く手を合わせた。

去年亡くなられた一人息子のKさんー私にもよく便りを下さったことがフト頭をかすめたけれどそれにはふれず「昨日は大変だったわね。びっくりされたでしょ」と彼女の方に向き直る。「ほんまにびっくりしましたわァ」と高橋さん。隣室のNさんがトイレで倒れているのを彼女が発見し、Nさんは救急入院されたことを私は出先からの帰路で知った。

Nさんにそういう事態の起り得ることは私も、寮長もナースも十分予測はしていたが、高橋さんが血圧が昇る位のショックを受けられたことはよくわかる。「明日は診療所へ来てネ」暫くの何気ない会話の中で彼女の鎮静をたしかめ私は辞した。

玄関まで来ると案の定、田井さんが私を待ち受けている。田井さんは八十八才の偉丈夫だ、柔和な笑顔にも一寸威厳を感じる。

彼は、この夏私の裏庭に立派な朝顔棚を作って下さった。毎朝、雨戸を開けると眼の前にきれいな朝顔が沢山咲いていて、私はずい分力づけられて過ごした。

今日はその跡にチューリップを植え込む相談だとすぐわかる。きちょうめんな田井さんは私ときちんと話を決めて置きたいのだ。

二人は連れ立って私の裏庭へ向かった。道の右側は寮の皆さんの花壇になっている。一㎡とか二㎡、思い思いに区切られた花壇には、それぞれきれいに花が咲いている。草一本見つかからない丹精が見える。今は「しゅうめい菊」のまっ白な花をとて美しいと眺めた。「田井さん、みんなお任せよ。あなたの思うように植えて下さればいいのよ、私は楽しんで花を見せて頂くだけよー。お体無理しないでネ」田井さんは私のことばに、ニコニコうなずき帰って行った。

このチューリップ畑の横の二㎡程の草地を私は前からきれいにしたいと考えていた。

貼りついた芝を剥がしていい土にし、春咲きの草花を播きたいのだ。

この辺りは粘土質なので表の広い庭には芝を貼った。緑の芝生は美しく柔らかそうだが芝生の根はとても強く、細いランナーはどこへでもぐり込み根を張ってしまふ。

これを剥ぎ起こすのは大仕事である。が私は小さな園芸用のスコップでこつこつやればと掘りはじめた。暫くやってみてとても手に合わないことがわかって来た。「ここでしたの」と満子が現れた。早速うれしい協力がはじまる。話し声が聞えたのか、いずみ寮の大津さん、吉村さんも出て来て、仕事はどんどん捗った。私は椅子を持って来て眺めていればいいことになった。芝は剥がされたり、土を抱いたまま掘り上げてコンクリートの上に干された。賑やかなおしゃべりと笑い声の中でこの大仕事が正に「朝めし前」の仕事に片づいてしまった。

昼すぎ庭に出て見ると秋の晴天の下で芝はもう枯草になっていた。私は少しの新聞紙とマッチを持って出て芝を重ね火をつけた。

芝はパチパチ音を立てて燃え、香ばしく匂った。久

しぶりのなつかしい香り！

風が流れると一気に白い煙が立ちのぼる。その煙の中にも芝焼きのかおりが一パイだ。

いつの間にか又、満子、大津さん、吉村さんが出て来て寄って来た。まだ乾き切らぬ芝もほとんど土を落として重ねる。炎が小さくなってくすぶりはじめると誰かが顔を寄せて「ぶうっ」と息を吹きかけたり、枯枝を拾い集めて来たり、再び賑やかなおしゃべりと笑いの中でみんなが「火遊び」を楽しんだ後には小さな焼け土の一と山が残った。

誰もが遊び足りて散ったあと、私も家に這入り、何の装備も無く土いじり、火遊びをした手を洗い、髪を梳いた、と芝焼きの香りがどこから流れ出し、せまい洗面室一パイに漂った。

(一九九六年一〇月)



入 試

幸か不幸か近頃の「地獄」という冠詞のつくようなきびしい入試には縁のない私である。

このテーマを頂いて、自分自身を考えたり身近なところを見まわすと、なるほど私はもう時代離れの人間なんだなあ、と思ってしまう。

自分の体験をふり返れば二回の入試が浮かんて来る、が、ともかく大昔の事だ。そのドキュメントは正になつかしいメルヘンである。

第一は、昭和三年の女学校入試である。当時、父の病気でわが家の家運は深い逼塞の中に在った。姉と私の二人を女学校へ進ませる余裕がなかったのだと思う。女性も自立出来る職業を持つべきだという父の考えがあった。その父の選択で私の進路は学費の要らない「師範学校」と決められた。

小学校六年を終え、高等小学二年を経て進学するのである。私は何の抵抗もなくそれに従って高等科に進

んだ。

その頃は小学校六年一組五〇人の中で、女学校や中学校（男子）へ進学するのはほんの二、三人しかなかった。

私は小学生になる前から読書が好きだったし、小学生全集という立派な全集を父に買ってもらったり、女学生だった姉が学校の図書室から借りて来てくれる沢山の本を読んでいて結構多感な少女だった。

そういう私なのに父の言うままに何故従順だったのかと今考えると不思議な想いである。

高等科一年の三学期に入った頃、父の実弟で隆盛な開業医である叔父が私を女学校へ進ませる援助をしようとの申し出があるとかで、急に女学校へと方向転換することになった。

受験準備は全くなかったけれど、ともかく叔父の家から通学出来る「県立K高女」を受験することになった。

丁度この年から入試の方法が従来の筆答から面接一辺倒に変更したそうで、試験は沢山の教室を順々にま

わり、二、三人の先生と対面し一人で問いに答えるという方式であった。

いわゆる受験学習もせず又何故か何の緊張感もない私の答は型破りで先生方には面白かったのではなかったかと、後日私は思い出の中で考えたことである。

例えば「あなたは何故この学校へ入学したいのですか」と問われ、「私は叔父の世話になることになり、又、叔父の家には従妹が一人子なので淋しいから一しょに勉強するためにまいりました」とか、「あなたは月を見て思うことは何ですか」との問いに「お月夜、明るい」「ほかには」「兎が餅をつく」というような答えをつづけた。

外に出て沢山の見知らぬ受験生たちが「私ネ、良妻賢母になるためにこの学校へ来ました。言うたんよ」「私も」との会話や「あの月の問題ネ、私大陰暦と答えたよ」「ああ私も」という声に私は心からびっくりしてしまった。

試験が終って付添ってくれた祖父と田舎道を歩いて帰り乍ら、今日、私が答られなかった唯一の問題は

「キョーケンオノレヲジシ」という言葉の意味だったことを話すと、「そんなこと知らなんだんかいな」と祖父は情けなそうに言い黙ってしまった。

小学校入学以来、「式」という時には必ず校長先生が白い手袋の両手で恭々しく奉持し、重々しく読み上げられる「教育勅語」の中の一語であることは知っている。

いつも最敬礼の姿勢で聞かされる勅語は全文とくに暗誦出来るが意味のわからない言葉は沢山ある。これもその一つであった。

しかし、それ以来私は「恭儉己ヲ待シ」なる言葉を忘れない。

K高女へは不思議にも上成績で入学出来た。そして、女学校の卒業前年になり私は父から「医学」へ進むように求められたのだ。

女学生の私は自分の将来は「小説家」か、「女高師」へ進んで教師になりたいと考えていた。が、父の言葉にさからうことは出来なかった。

父は故郷でよくはやる開業医であったが、大正七

八年に大流行した「スペイン風邪」に感染し、当時唯一の解熱剤である「キニーネ」剤の薬害により聴神経を犯され、次第に聴力を失っていた。

私の幼い頃、父は母校の大阪大学病院で耳の治療を受け乍ら聴診器の要らない眼科の再学習をしていた長い留守の時があった。

まだ小学校にもゆかない頃から母に教えられ私は大阪の父に手紙を書いた想い出がある。

私が女学校入学の頃はもう父の聴力は完全に失われていたが、家族間の会話は殆んど読唇で足り余り不自由はなかった。

しかし、来患は少なく父の失意、母の苦労はよくわかっていたので私は父の希望に副う事が当然と思ったが、医師になりたい気持はなかった。

昭和七年三月、丁度新しく東海道線を走りはじめた「ツバメ号」で父と私は上京した。神戸―東京間を八時間で結ぶ超特急列車であった。

その頃、医科大学の門は女性の入学を拒否していた。女性の医師希望者は「女子医学専門学校」へ進む外な

く、当時日本に三校開設されていた女子医専の中から私は女学校の校長先生のすすめにより「帝国女子医学薬学専門学校医学科」へ願書を提出していた。

この母校は戦後共学となり、医・薬・理と理科系専門の「東邦大学」として今日では既に創立八十年を通過している。

私たちは母の弟、叔父の住む横浜の家に旅装を解き、ここから東京大森区の学校へ受験に通った。早稲田大学で学んでいる母方の従兄が案内役を引き受けてくれた。

試験課目は、数学・英語・作文・面接程度であったと記憶する。第一日目の筆答は先ず出来たと感じたが、二日目の面接は広い講堂の一角に数名の教授が大きな机に並んで座して居られる前へ一人で扉を開け数メートルを机迄歩くのである。

田舎者の私にとっては怖ろしいような設定の中で私は教授方の視線の集まる中を進み乍らコチコチになっ

てしまっていた。
「あなたの趣味は何ですか」

「この方程式を読んで下さい」等

白紙に墨書された無言の質問紙が目前に示される、
ここで私は「Nac1」の記号をよみまちがえてしまっ
た。

終ってこの事を話すと父は「そんな問題を間ちがえ
たらもうあかん」と、がっくり打ちおれてしまった。

その夜叔父は「兄さん、最悪の場合でも、横浜で一
年予備校で学び再挑戦すればいいじゃないですか」と
と父を慰めていたが、私はそれを他人事に聞いていた。
心のどこかに、この試験を落ちたら自分の好きな道に
進もうという期待がひそかに生まれていたからである。

二日後の発表日、父は「行ってもあかん」と仲々動
かない。叔母があんまりおけると発表見れなくなる
んではと励ましてくれ、私たちはやっと腰を上げた。
京浜急行、梅屋敷駅で降りると、何人かのうなだれた
受験生に逢った。父はそれを見ると一そう元気を失っ
たのかその歩みが進まない。従兄と私は自然に父を残
すことになり先に学校に着いた。矢印にしたがって進
むと校舎の外壁に大きなパネルが貼り出されている。

数名の人たちがその前に立って見て居られた。私も急
いで自分の番号をさがしたが見当らない。ドキッとし
てよく見るとそのパネルは、補欠合格番号でありすぐ
並んで正合格者の発表が貼り出されている。

あった！私の「31」という番号がはっきり見えた。
私は思わずその前へ走り寄り手を伸ばし「兄さん、こ
れ」と従兄に指さして言った。

従兄は意外にまじめな顔付でうなづき、つとどこか
へ行った。

私は校門へ走って行った。トボトボ歩んで来る父の
姿が向うに見える。私は手を振った。大声を出しても
父には届かないのだ。フト顔を上げた父に私は両手で
大きな○を作って見せた。父は足を止めニコッとうな
づいてからしっかり歩を早めて来た。

電報を打って来たよと従兄が帰って来、三人で学内
に這入り、入学、入寮等の手続きをすませ夕方近く横
浜の家の玄関を開けた。

すぐ叔母が「かねさん、おめでとう」と明るく祝っ
てくれる。「叔母さん、どうして？」と問いかける私

の手に一枚の電報用紙を渡してくれた。母からの祝電であった。

「パスシテアンシンヤレヤレ」……

あれから数年は従兄と逢うとよくこの時のことが話題に上った。「あの時の叔父さんにはまいったナー」と彼、又、母の名電文は私の子供たちの入試にも伝承されることになった。

(一九九七年三月)



あとがき

予想もしませんでした長寿を頂いて、この秋には「八十三才」になりました。神様の大きなプレゼントを深く感謝しています。殊に「みぎわ園」を創めましてからの三十年はすごい時でございました。

沢山の方に支えて頂き守っていただいてまいりました。本当にありがとうございました。

この辺で一筆感謝の証しをさせて頂くことにしたいという思いです。

「ペテルでのヤコブにどこか通う気持です。」などと申せばバチが当りそうですけれど。

題字「あそび」は習字教室の教授 石坪琇景先生にお願いいたしました。これも大きな感謝と光栄です。

一九九七年（平成九年）十一月

松 尾 周 子

